

『教義に関して信徒に聞く』試訳(1)

岡村 祥子

解説 (ジョン・クルソン)

「教義に関して信徒に聞く」は、ランブラー誌の1859年7月号にニューマンが出版し、その一部に補足と修正を加えたものが1871年、『四世紀のアリウス派』の三版の付録として再版された。これは最近1940年にドイツ語に翻訳されたが、英国ではそれ以後再版されることはなく、今回の版が1859年と1871年度版のテキストの両方を照合した最初のものである。

この作品はニューマンの教義発展論を一層理解するためだけではなく、彼が自らの神学で信徒を重視したことを評価するためにも根本的なものである。また、この作品は1858年の『大学教科についての講演と試論』の出版と1864年の『アポロギア』執筆との間、なぜ彼がカトリック作家として沈黙していたかを明らかにし、またキングズリーの攻撃に対してなぜ彼が間髪をいれずに返答したかを説明する。しかしながら、このように重要な作品の再版が著しく遅れたのも仕方のないことであったといえる。今日、信徒の主導権はいたるところで大きくなりつつあるし、かつてないほど教皇の支持を受けている。またその基礎としてコンガール師の『信徒神学』のような作品もある。しかし、ニューマンの時代には正にその反対であった。彼のこの論文の出版は政治的に自殺行為であったし、そのため、教会での彼の地位は決して完全には修復できないものとなった。それまでは英国カトリック教会の両

極端の意見を誠実に仲介する者として、彼の名声は一点の曇りもなかったが、この出版で、個人的に教皇の不興をかい、ローマでは英国で最も危険な人物といわれ、ニューポートの司教からは公に異端告発を受けた。

1858年11月カトリック大学の学長職を退いた時、彼は持ち越していた重要な神学の作品を執筆するため自由になったが、すぐに再び彼の意志に反して、論争に巻き込まれることになった。その論争には、かつて彼がアイルランドで戦ったが実りのなかった一連の原則が含まれている。

カトリック月刊誌、『ランブラー』は1848年、オクスフォードの改宗者J.M.ケイプスが始めたが、当時、別のオクスフォードの改宗者で聖職者、リチャード・シンプソンと若いジョン・アクトン卿によって編集されていた。彼は1857年23才で共同編集者としてシンプソンに加わった。その雑誌の発行部数は少なかったが（1859年5月号の販売部数は800部強であり、編集者たちは1000部あれば健全だと考えていた。）その影響は部数とは比較にならないほど大きかった。その目的は非カトリック世界にカトリック的思想を復興することであった。そのためにランブラー誌は、カトリックのジャーナリズムが経験したことのない学識の水準と教会に対する批判的態度を併せ持っていた。1859年の始めまでに特別な手段が講じられなければ、その雑誌は次に出るイングランドの司教教書の中で譴責を受けることが確かであった。どちら側も唯一同意できる仲介者としてニューマンに助けを求めた。

『ランブラー』の多くの記事の文体が教会側を怒らせる原因のひとつであった。これについて責任があるのはリチャード・シンプソンだと考えられていた。「彼は教会について辛辣な調子で書く、時にはあたかも部外者のように」とひとりの信徒はニューマンに書き送っている。ニューマンの仕事は、まず、譴責の脅しをひっこめるという条件のもとに、シンプソンを説得して、辞職させることであった。共同編集者のアクトンも、同様に教会当局者には

受け入れがたかったので、ニューマンには周到な仲裁者に古くからある方法しか残されていなかった。即ち、『ランブラー』を廃刊にするか、彼自身が編集者になるかである。

この争いの一般に信じられている話は以上であるが、綿密な検討と新たな証拠によって、もっと複雑な事情が浮かび上がってくる。

1858年6月号の『ランブラー』にワイズマンの『過去四人の教皇の思い出』の書評家を強い調子で非難するティアニー参事の手紙が掲載された。彼の非難は、歴史家リングルドがレオ12世によって枢機卿にされたことをワイズマンが拒絶したことを、書評家が認めたという点である。この非難は間違いと判明し、謝罪はなされたものの、枢機卿は傷つき、疑いは晴れなかった。8月号にシェルエルの『メリー・ステュアートとカトリーヌ・ド・メディチ』にたいするアクトンの短い書評が載った。そこでアクトンは「どんなカトリック教徒も彼の信仰ほどでない」と主張した。何気なく「聖アウグスティヌスが西洋のもっとも偉大な教会博士であるからとって、彼がヤンセニズムの父でもあることを隠す必要はない」と少々無頓着に述べて、彼の論点を説明しようとした。この記事が嵐を引き起こし、9月にデリンガーがアクトンの所に来た時、アクトンはその見解の根拠と神学的正当性を出すように説得された。それは手紙の形で12月の『ランブラー』で出版された。

それに続く撤回と修正を考えるとアクトン自身の立場は注目値する。1858年9月シンプソンへの手紙の中で、彼は「ここにデリンガーが滞在していますが、彼はアウグスティヌスについての議論のさい、明らかにされたカトリックの神学者の無知ぶりを大笑いしています。...よく考えてみると教会が非難した誤りはグラティエ博士の作品の中にあります」と書いている。

アクトンはさらに11月ワイズマンに手紙を書いて、次のように述べている。(シンプソン宛の手紙によると)「デリンガーは次号でびっくりするような答えを準備しているようです。次号は人を傷つけるよりも驚かせ、敵を改心さ

せはしないが、閣下を確かに満足させることになるでしょう。閣下の祝福云々」。しかし枢機卿は満足せず、デリンガーの手紙をローマに回した。アクトンはニューマンの所に行き、このニュースを知らせ、12月には長い間話し合った。アクトンがシンプソンに宛てた手紙の当該部分はこの会見とニューマンの態度について述べているが、これまで完全な形で採録されたことはなかった。

「僕は、3時間、尊敬すべきノグス師と話し合ったが、ワイズマンやワード、ダルガンのような人々についても、また、他を支配しようとする傾向や神学者の厚顔無恥について、つまり、君や僕だったらウイスキーを飲みながら語るような事柄について、彼は僕も驚くほど本心を明らかにした。僕は彼が外交的手腕を捨てたり、口を全くつぐんでしまうとも思わなかったが、彼がみせた『ランブラー』への強い関心に非常に驚いた。僕がニュースを告げた時、彼はひどく惨めになり、歯痛に苦しむ老女のように、暖炉のそばで身体を前後にゆすりながら、長い間呻いていた。……この動きは『ランブラー』をつぶす思惑とデリンガーに対する嫉妬心の両方からおきたと彼は思っている。我々がイエズス会士か、アーリントンを疑っているのかと彼は尋ねた。そしてついにその源はプロンプトンにあるということに傾いた。彼には今のところ忠告はない、なぜなら彼はローマでのこの事件の成り行きを知らないし、また、もし我々に決心があればの話だが、我々の誌面では神学を取り扱わないことを表明しないかぎり、そのような一件に関しては安全でないと思っている。彼はとても友好的で、『ランブラー』は計り知れないほど貴重だと考えていた。」

聖アウグスティヌスについて侮辱的な文を書いたのはアクトンであったが、『ランブラー』の不祥事の犠牲になったのはシンプソンであった。この事件に関するエドモンド・ビショップのコメントは、1859年2月付けのアクトンからシンプソン宛ての手紙の脚注として鉛筆書きされている。「それで

数日中にアクトンはシンプソンを独り残して、イングランドから<消えた>、その結果、シンプソンは自らの意に反してアクトンが起こした嵐に立ち向かうことになった。気の毒なシンプソンは改宗者にすぎないのに、2月の終わりまでにすでに叩きのめされてしまった。」

1859年3月21日になって、ようやくニューマンは『ランブラー』を編集する決心をした。決心には数週間の祈りと熟慮が必要であった。それはまた、『ランブラー』が継続されなかったら、シンプソンがどういう行動にでるかを恐れたためだったかもしれない。というのは、もし彼が退いて雑誌の廃刊ということになれば、彼は全貌を公にし、財政上の損失の補償を司教たちに要求すると脅かしていたからである。ニューマンは「辛い償い」として、またウラソン司教とワイズマン枢機卿の明らかな希望を叶えるためにだけ、ランブラーを引き受けた。彼の目下の方針は『ランブラー』を論争の最前線から引き上げることだった。

1858年12月、アクトン宛てにニューマンは「本来の学問的な方向に戻そう」と書いた。「教育的で、賢明で、楽しめるものにしよう。できるかぎり多くの人を褒め、中立の立場にある友を得るものにしよう。そしてその過程で人々の興味を呼び起こし、皆の雑誌になるようにしよう。そうすれば、適切な時に絶好の一撃を効果的に与えることができるであろう」と。

この雑誌は三つの理由のために、当時間違った状況にあるとニューマンは信じていた。それは神学そのものを扱ったこと、しかもそれを雑誌の形にしたこと、そして信徒が神学を雑誌で論じることを許したことである。「信徒が神学について書く時には説明が必要であり」、特にイングランドのような宣教国では、教皇座の現在の困難を考えると、信徒は教皇座が支持する時にだけ書くことが出来るのであって、当局の批判を出版するのは、必然的に災難を招くことになり、シンプソンのような改宗者がそうするのは「改宗者は全て危険」という一般的な考えを実証するだけである。

原則は妥協しないで、言葉の調子とテーマの選び方次第では意見を言うのも可能であると、ニューマンは依然として信じていた — (今日、『ランブラー』を読むとなぜそんなに大騒ぎをするのかと思うが、) — しかし、「人々は他の事柄と同様、神学についてもとても敏感である。」というアクトンの皮肉な意見の方が真実に近かった。

『ランブラー』の新しいシリーズの巻頭の言葉の中で、ニューマンは「根本は誠実なカトリック者であると私が思っている人々のよい評判を損なう」ようなことは何もしないように苦心した。ニューマンは「彼らに代わって懺悔や痛悔の行為をするのは正しくないし、無礼で卑怯である」と思った。それで彼は故意に内容、傾向、目的、調子について語ることを避けた。

シリーズの第1号、1859年5月号はまず無難に見える。それは「北部の島への宣教」と題した記事で始まり、枢機卿の最近の旅での説教、講演、演説に関してであった。それは甘ったるい賛辞で厚く塗られていた。「イングランドのどのような高名な人物も、その折のワイズマン枢機卿が示されたほどの精神と知力でもって、彼の学識豊かな心に向けられた質問に答えることなどできなかつたらう」と述べている。その他に「16世紀における宗教団体」や「ゴシック建築の発達」、「古代の聖人たち」やラムネーについてのデクスタイン男爵の記事が載せられた。書物紹介もあり、ひとつはジョン・ヘンリー・ニューマンの『大学教科の講演と試論』についてである。それには「これは著者の全生涯の宿命の一例を示しているに過ぎず、熟慮された計画や彼自身の見解によってではなく、義務やその時の状況によって出版を余儀なくされた」と同情のこもった注釈が付記されていた。

しかしながら、このアピールは、親しいが冷淡な読者によって無視され、彼らは新シリーズは旧シリーズとたいして変わらないという偏見の根拠を見出すことだけに関心を示した。5月号には攻撃対象となりうる点は次の二点しかなかった。一つは通信欄の手紙で、「信徒が神学を研究するのはどの程

度まで許されるか、あるいは望ましいか」という問いかけで終わっている文である。もう一つはある意見で、それは時評欄の狭いスペースに小さい文字で深く埋もれていた。それには署名はないが、ニューマンが編集者として書いたもので、初等教育に関して設立を提案された王立委員会についての英国司教の判断を問題にしていた。それには次のような意見が含まれていた。

「特に信徒に関する問題に関しては信徒の意見を知りたいと閣下各位が本当に望んでおられると私たちは確信している。最近の無原罪の御宿りの教義の例にあるように、教義決定の準備段階においてさえ、信徒に聞かれるとすれば非常に実際的な問題について、寛大で同情ある行為を期待するのは少なくとも当然のことである。」(下線部筆者)

この一節、とくに下線の部分が、『ランブラー』の反対者たちの問題にした点であった。その中心はアショーの神学教授ジロウ博士で、以前にデリンガーの記事を当局に報告した人物であった。これは非常に策略にたけた的確な選択であった。というのは既刊の『ランブラー』で、司教たちは要点をついた、しかも専門的な批評にさらされていたので、教育問題に対して極度に神経を尖らせていた。そして、なぜニューマンが『ランブラー』の新シリーズの最初の号で、旧シリーズで払われた努力を擁護する必要性を感じたかを理解しようとするならば、今日においてさえなお意味をもつ問題について知らねばならない。

初等教育の状況は非常な関心を引き起こすものであったので、現存の協定が施行される途上で一層の情報が必要であることに全ての党は同意していた。1858年「あらゆる階層の人々に健全で安価な初等教育」を拓げる手段について報告するよう、ニューカッスルの委員会が任命された。ひとつの重要な問題は諸宗派経営の学校の自由と、学校の助成金への公的な統制とをいかに調和させるかということであった。

司教側の公式の指導がなかったので、『ランブラー』はカトリックと委員

会との協力の問題をなお議論する余地のあるものとして扱い、1859年の1月と2月に二つの記事を公表した。署名はなかったが、その記事はネイスミス・スコット・ストークスの書いたものであった。彼はストークス式銃の発明者の父で、下院議員の故リチャード・ストークスの祖父であったが、彼自身改宗者であった。彼の兄は結婚とローマカトリック教会に入るという二重の咎のためにケンブリッジを追い出された。そして弟は1844年ケンブリッジを退学した後、しばらくしてカトリックになった。彼は弁護士の資格を取り、カトリック貧民学校委員会の第一秘書となった。この委員会は、まだ法的に認められていなかった司教たちの代わりに政府と交渉するために設立されたものであった。シンプソンの見解によると委員会の実務はストークスが引き受けており、彼を「寡黙で陰気な人物」と述べ、彼は「当の委員会を全く異質な要素をもつ人々で構成して、彼の人材の豊かさを示していた。また彼は従っているように思わせながら、実際は委員会を指導し、支配していた。それは彼の魅力的な性格のためでも、へつらうという卑しい技巧のためでもなくて、実際問題への適性と結びついた強い意志、適時に的確な意見を言う能力、彼をよく思わない人々でさえ、認めざるを得ない見解の正しさと適確さのためであった。委員会が政府と有利な関係に立てたのは、この秘書の指導のおかげであった。彼の運営のもとで事態の進歩はこの上もなく満足すべきものであった。

ストークスは1853年にカトリック学校の視学官の一人になり、1871年には首席視学官に昇進し、職務上マシュー・アーノルドの同輩となった。後年、彼はアイルランドの初等教育委員会に奉職した。教育省での勤務時代にストークスを知っていたエドモンド・ビショップは「彼は最後まで変わらず堅実な人物だった。」と言うが、アクトンは彼のことを「我々の慎重な同僚」と言っている。

『ランブラー』の記事は確かにその著者の性格を反映している、即ち、専

門的で重厚で、しかも調子は穏健である。注目すべきことだが、記事は次のように始まっている。「教会当局に当然従い、教会の繁栄と進歩を促進することだけを願い、反対するようと思われる言葉は撤回し、また言おうとは思わない。……事実を述べるさい、我々の結論を強いるより、むしろ判断材料を提供したい。」

論争は次のようである——委員会のメンバーにはカトリック者はいないが、もし申し立てが間に合うように受理されていたなら、誰かが、指名されていたであろうに。そのような申し立てをしなかったのは、カトリック貧民学校委員会の責任であった。（「その委員会は支持者や一般の人々と意思の疎通を図らず、カトリック教会全体を教育問題に目覚めさせたり、情報を流す機会はまれであった。」）カトリック者は委員会に協力すべきである。もし議会在決定すれば、それは彼らが公的基金を受けているので、その証拠を提供しなければならないだけでなく、率直な協力関係は頑迷な考え、「カトリック者は自由な国家の悪い市民である」という疑念を払拭することになるからである。門戸を広く開放するという積極的な政策によって、建築助成金が教会や司祭館にではなくて、校舎や教員宿舎に使われていることを世間に知らせることになり、教育はペテンと不道徳と煽動のいかがわしい混ぜ物ではなく、疑いもなく役立つ市民と健全なキリスト者を養成することを目指していると知らせることになる。

依然として深刻な危険もあった。それは、複雑で、費用のかかる現在の宗派学校が国公立学校に取って代わられることであった。このような理由でカトリック教徒は委員会の代表者を学校に迎えるべきであった。そうすれば、彼らは宗教教育の効果を証明することになる。いかなる法則も譲歩する必要はない、というのは、委員たちは視学官ではなく、臨時に任命されたものであり、宗教教育の内容ではなく、その方法を問題にしたからであった。カトリック貧民学校は他と比較できないほど違っていただろうか。

もし助成金が打ち切られ、学校の水準が保たれないならば、カトリックの孤立の結果はどうかという問いかけで、筆者は2月号の記事を結んでいる。彼はアメリカで持ち上がった同じような論争を引き合いにだし、『ブラウンソン誌』からの以下の警告を引用している。つまり、プロテスタント版の聖書を読むことを強いらはするが、うまくいっている州立学校に通うカトリックの子弟は、カトリック学校に籍をおく子供よりも害は少ない。というのは、カトリック学校では教師は教養も給料も不十分で、彼らの行儀作法や影響力が子供たちの向上と洗練に役立つことがほとんどない。だから、州立学校で教育を受ける子供よりも、カトリック学校で教育を受ける子供の方が、信仰を保持していくことがむずかしい。

5月号の『ランブラー』に公表した司教たちの判断はバーミンガムのウラソン司教の司教教書からの抜粋で補足されていた。彼のこの件での議論はきわめて見事で、説得力にとみ、明快であった。当局の委員は視学官と何ら異ならず、問題は宗教的原則にまで及び、迫られた譲歩は、そのためにカトリック視学官制が必要とされ、確立された根拠の明け渡しに他ならず、宗教教育の内容と方法の区別は否定される。（「カトリック信者のみがカトリックの精神と心を理解できる」。）そして宗教教育の場に当局の委員がいると、宗教的な事柄に国家権力が関与するという印象を子供の目に与えることになるであろう。あちこちで司教の行為に反対する武器として刊行物を利用する者もあり、教会の自由、司教の分別や宗教上の規律を含む事柄で、信徒とその司牧者を裂くことになったかも知れない。

編集後記において、ニューマンはただちに次のように謝罪している、「我々は司教団が公式に見解を出していたことは知らなかった」と。（「明らかに11月に決定されていたのに春まで公表されなかった」）彼の全てのもめごとの原因に関する二番目の意見は全文引用に値する。

「司教団の特権を十分認識しているが、事の正当性から、また、特に司教

方個人にそなわっている慎重さ、寛大さ、思慮深さとから、司教方が特に信徒に関係する事柄に関しては信徒の意見を知ることが心から望んでおられると私たちは確信している。最近の無原罪の御宿りの教義の例にあるように、もし教義決定の準備段階においてさえ、信徒に聞かれるとすれば、非常に実際的な問題について、教会の群れの模範である人々に備わっている謙遜から、寛大で同情ある行為を期待するのは少なくとも当然なことである。私たちの言葉づかいや調子が礼を失していたら、その咎を深く悲しみ謝罪する。しかし、たぶん、撤回できない手段を講じられる前に、有力な信徒の思いを司教方はお知りになりたいと考えた時、私たちは決して尊敬を欠いてはいなかった。確かに、最近、アイルランドのコークで開かれた大会での信徒の目をみはるような熱意でもわかるように、教育の大問題のために司教のもとに召集されるべきと望むことは、司教方に対して決して尊敬を欠くことではなかった。もし私たちの言葉がその行為の説明と矛盾しており、—もし、私たちの口調が厳しく、尊敬に欠くものであり、—また、他のやり方で司教方に伝えるべきであるものを出版してしまっているのなら、深くお詫び申し上げます。また、私たちは教会の指導者と教養ある信徒の隔絶を不幸なことだと深く感じている。現在も過去の歴史においても存在するこの相互の隔たりを深く残念に、また苦々しく思うので、非常に恐ろしい災いをおこしかねない行為に意識的に関わったりはしない。司教方がその民の心、富む者と同様貧しい人々、貧しい人々と同様富む者の心の中に、また、信徒と同様聖職者、聖職者と同様信徒の心の中に生きられることを心から祈っている。しかしその件について、私たち自身の心からの望みがどんなものであれ、どれほど司教方ご自身の望みの方がはるかに強く、一層寛大で、心を尽くしたものであるかを知っている。だから、起きたことに関しては、ロープを張り、帆桁に人を配置するさいの熱意と活力の軽率な行為と考えて、態度の行き過ぎや粗野な水夫たちの軽率な行為と礼儀知らずをお許しく下さい。」

ニューマンが船の比喩を使ったことは意味深い。それより前に『ランブラー』に関する彼の方針を語るさい、彼はトレス・ヴェドラス地方におけるウェリントンの作戦を推奨した。だから海軍の比喩が出てくるのは、教会が解放の時を活用し再び前進する共同体となるのをみたいと心から望む人にとっては、当然のことであった。

不幸にも、この教育問題の衝突ほど、信徒と司教たちとの間だけではなく、とりわけカトリック者と改宗者との間を分かち溝の深さをはっきり見せるものはなかった。ストークスやシンプソンのような改宗者は、自分で認識している以上に、自由主義的な考えに関わっていた。その考えは、今日、福祉国家の中で実現された。彼らにとって、社会がより自由で開かれた形へと進化し、無知は退けられ、社会正義が拡張されねばならないことが、自明のことであった。教会の外も、この新しい社会に適応するために、また変化すべきであり、カトリック者は共存という積極的で開放的な政策に備えなければならぬと考えた。その政策を出した時、一人の英国人が他の同国人から期待する確信と信頼をもって、当然受け入れられると考えた。

不幸にも、この提案を受けた大多数の人々は英国人とは名のみであった。精神的習慣、教育、素質において、彼らは、紳士録や王立委員会、グラッドストーンやアーノルドのイングランドよりも、バチカンや教育をうけた外国の学校や神学校と共通点をもっていた。彼らにとって自由主義は1848年にピオ9世に起こったことであり、また、改宗者の中の批評家が考えたように、彼らは「ハイペリオン」の場所を奪われた神のように「影深き悲しみの谷間深く、健やかな朝の息吹からはるかに沈みこんだ」所に生きていたのである。臆病と無知からくる疑惑のために、彼らは危険を伴う解放の好機よりも、無気力で閉鎖的な安全の方を好んだ。また、率直に話すことを恐れたために、彼らは、いかなる譲歩も黙示録的な規模の大災難を早めることになることになると信じこんでいた。

まず、シンプソン、そしてニューマンも知ることになるのだが、もっとも男らしい人々でさえも、そのような気風に感染していた。3月8日のシンプソン宛の手紙でウラソン司教は「司教側は行動の理由を説明することも、カトリック信徒に我々の行動の根拠を知らせることも、全く必要でない。」それにつけ加えて「『ランブラー』に対する司教側の見解は教育問題の記事だけに基づいているのではない」と言っているが。ウラソンはその著者について手厳しく、次のように語っている。

「ターナー司教が『ランブラー』の最初の記事を承認されたと君が私に言ったので、私は司教から一通の手紙を受け取ったと告げなければならない。その中で彼は承認するどころか、先の木曜日にストークス氏と会って、彼を諷め、彼のやり方がどれほど私たちの主張にとって有害であり、どれほど私たちが嘆いているかと書いている。

私の司教教書はもっと強い調子で書かれるべきであった。我々と公的な関係にあるので、自らの感情を公に伝えることができるのに、(あるいは、いずれにしても伝えることができるのに)、こちらの意図を確認することさえしないで、我々に背くように信徒に訴える人物の行為を指摘するべきであろう。私が教書で調子の強さを抑えた唯一の理由は『ランブラー』の記事を、直接侵害することを避けたかったからである。」

4月にシンプソンはモンタランベールの『通信』誌に出すつもりで、長い手紙の形で事件についての彼の見解を書かずにおれなかった。不公平感がなお強くくすぶっていたために、激しく、やや冗長であった手紙は出版されなかったようだ。しかし、それにはすぐれた洞察力がみられた。シンプソンはこの「信徒に対する一撃」について「英国の聖職者の権力政治が敵ではなく友に対して勝利をおさめた。新しく改宗する者もなく、宗教的情熱もかきたてられることなく、彼らの大砲や攻撃で、慈悲や情熱の爆発が起こることもなかった。彼らは自らの軍隊にたいして勝利をおさめ、キリスト教による征

服の情熱ではなく、内乱への情熱をかきたてた」と述べている。彼は古いカトリックの家柄出身の国会議員で、非常に影響力のある信徒からの手紙を、次のように引用している。「この一件は、執筆活動や他の公的生活で、自立した信徒として、あるいは、司教とは異なった立場と役割で、宗教のために働きたいと思う全ての人々に対す警告である。もし、どんな働きも認められないのなら、そう言ってもらいたい。もしカトリック文学が司教教書に限られるなら、また、政治は司教の追隨にすぎないならば、関係者全てにそう知らせてほしい。もし、『信徒の唯一の仕事は支払うこと』であるという枢機卿の言葉がこの国の法律ならば、我々がもっとキリスト教的な国に脱出できるように、そう知らせてほしい。」シンプソンは注釈をつけて「このように信徒が不安を抱くのは、聖職者の権力を作り上げている厳格な行政組織の当然の結果である... 聖職者がしっかり団結することで、自らを特権階級とし、独自の専門教育を施し、独特な考え方をしている... 思いのままに宗教を扱うよう専門的に養成された指導者たちに従うために、カテシズム以外の宗教問題について信徒に知らせてはならない。宗教は管理に、聖職者は神学の番人に、考える信徒は『容疑者』の一団になっている。その信徒は革命を企んでいるとみなされて、ただ恐怖と聖職者組織の外圧のために、ひとかたまりになっている。」

シンプソンはつづけて次のように言っている。教育問題についての司教団の非協力政策は、英国プロテスタント側の軽蔑を引き起こしたにすぎなかった。宗教教育の問題は、もはや政治問題ではなく、社会問題であり、交渉や妥協、またあらゆる英国式政治技術によって解決をみるのが最善である。「我々は再び川を逆流させ山にのぼらせ、問題を社会的差異に代わって、あるいは、それと同様に、政治的なものにしようとしている。」

これらの意見がニューマンとウラソンの会見以前に出されていたことは記憶に値する。この有名な会見が行われたのは5月22日であった。その席で、

ニューマンは『ランブラー』の5月号でさえカトリック的な好みからすると不穏当すぎると言われた。「古い精神の遺物が残っている。それは腹立たしいものである。我々の信徒は平和な一団で、教会は平和だった。信徒は深い信仰を持ち、疑う者がいるのを聞くことを好まなかった。」

ニューマンの会見の記録は続く、「私は強く自分の意見を主張した。彼はある面だけを見、私は別の面を見ていた。司教たちは信徒の状態、たとえば、アイルランドで彼らが不安定でありながら、従順であることを理解していなかった。ウラソンは『信徒とは誰のことを言うのかね』というようなことを尋ねた。私はこのとおりではなかったが、彼らの存在がなければ、教会は馬鹿だけのものになると答えた。すると彼は『アイルランドの雑誌のようなものはないのか』と言ったので、誰が指導できたでしょうかと私は言った。」

ニューマンが最初にアイルランドに行った理由は、『ランブラー』を引き受けたのと同じさまざまな目的に対して何らかの手を打つ希望があったからだ、ウラソンにわからせようとしたが、無駄であった。彼は私の語ったことに何ら重きをおこうとしなかった。そしてニューマンが当初編集を引き受けたくなかったことを彼に思い出させると、彼は突如向き直って、「どうして辞めないんだ」と言った。

経営者とニューマンの経済力を考慮して次号（7月号）発行後に『ランブラー』を辞めることで合意した。そこでこの会見は全く「不快感を残さずに」終わった。

ニューマン辞任のニュースが広まったので、彼の安堵感は増大する悲しみと混ざり、次第によくある挫折感となっていった。ニューマンと思いを同じにした改宗者はその出来事を司教たちが時代の挑戦に対処しきれない印とみなしており、さまざまな絶望の叫び声がニューマン宛の手紙には記録されている。「私たちは改宗者の司教が出るまで待たねばならない」と一人が書き、一方、H.W. ウィルバーフォースは「我々の司教がイングランドとイングラ

ンド人を理解していないと痛感している。カトリック信徒も文句をつけるだろうが、むしろ私が恐れているのは、カトリック者の知的教育の程度がプロテスタントにだんだん遅れをとり、一般の人々への影響力がなくなることなのだ」と書いている。

再び、ニューマンは自らの使命が拒絶されたと感じた。彼は「神の御旨によって、百年後に実現するだろう」と考えて、自らを慰めようとした。しかし、「私が去った後、私に成就しえた『仕事』を辞めさせられたことが分かるだろう」という苦しい思いを抑えることはできなかった。再び、彼は誤解に対して自己弁護せざるをえなかった。(5年後に『アポロギア』が出ることになるのだが、彼の自己弁護は常に最良でもっとも彼らしい著作を生み出す強力な動機であった。) この論文もその結果である。